

上野国・戦国時代その2 関東管領上杉家家宰・長尾一族

綾戸取水口から取水した用水は4kmの導水路、を経て赤榛分水工に到達します。ここで赤城山南麓を東西に延びる赤城幹線と榛名山東麓を南北に南下する榛名幹線に分岐されます。この赤榛分水工のある地区は白井地区と呼ばれ、かつて戦国時代には白井城があった白井宿があります。

今回はこの白井城の城主であった長尾氏一族のお話です。

1. 長尾氏

長尾氏は、鎌倉時代から山内上杉（やまのうちうえすぎ）氏の筆頭家臣として長く栄えた一族で、上野、武蔵、越後の守護代を勤め、家名は江戸時代まで続きました。

長尾氏は、相模の古代豪族である鎌倉氏一門の一族で、長尾の家名は相模国鎌倉郡長尾庄（現：横浜市栄区長尾台町付近）に住んで長尾と称したことに始まります。

当時、有力御家人の三浦氏に仕えており、宝治合戦で一族がほぼ全滅し一時は没落しましたが、わずかな生き残りが関東管領として京の都から関東へ入った上杉氏に仕えました。その後上杉氏と姻戚関係を繰り返し、上杉家中での地位を向上させ、上杉氏が関東・越後に勢力を拡大するとその家宰や守護代として各地に諸家を分裂させ繁栄していきました。



2. 白井長尾氏（しらいながおし）

関東管領の上杉憲顕に仕えて長尾氏を中興した長尾景忠の孫の時に上野国白井（渋川市：白井城）を本拠とする白井長尾家と総社（前橋市：蒼海城）を本拠とする総社長尾家とに分裂しました。

白井長尾家が隆盛したのは、白井城を築城した長尾景仲とその子景信のとき、上野守護代、武蔵守護代、山内上杉家家宰職を兼ねて上杉家における重責を担いましたが、景信の死後に家宰職を総社長尾氏に奪われてしまいました。

永享の乱（えいきょうのらん）で室町幕府と関東管領に滅ぼされた鎌倉公方足利持氏の遺児成氏は、新たに鎌倉公方に就任しましたが、父を葬った関東管領上杉氏を恨み、

享徳3年（1454年）に上杉憲忠を暗殺してしまい、上杉氏との対決が始まりました。

成氏は、上杉氏を支援する室町幕府の攻撃を受け、下総古河城に籠もり古河公方を名乗り、山内・扇谷（おおぎがやつ）上杉両家及び幕府から派遣された堀越公方・足利政知との戦いに突入り20年に及ぶ戦乱となり、両者は五十子（いかっこ：埼玉県本庄市）に陣を敷いて18年におよび対峙していました。（享徳の乱）

その様な中で、関東管領上杉家の家宰であった白井長尾家の長尾景信が陣中で死去してしまい、家督はその子景春が継ぎましたが、上杉家の家宰職は管領上杉顕定が景春の叔父である総社長尾氏の長尾忠景に就任させ、この行為に景春は顕定や忠景に対し、深い憎悪を抱きました。

景春は武勇を誇り、また白井長尾家は一族の中でも勢力が抜き出ており、文明8年（1476年）6月、武蔵国鉢形城（埼玉県寄居町）に入り反旗を翻しました。（長尾景春の乱）この挙兵に多くの関東各地の国人・地侍が呼応し、景春の勢力は侮りがたいものとなりました。

しかし、景春の従兄弟である太田道灌（扇谷上杉家家宰）の活躍により、景春は敗退を繰り返し、景春の挙動に期待していた古河公方の足利成氏も永い戦いに疲弊し、幕府と和議を結びました。

景春は北武蔵で抵抗を続けますが、最後の拠点であった日野城（埼玉県秩父市）も道灌に攻め落とされ、景春は成氏を頼って落ち延びました。

長享元年（1487年）山内・扇谷両家は決裂し、長享の乱と呼ばれる両上杉家の抗争に突入すると景春は扇谷上杉家に加担して一時は白井城を喪失しますが、永正の乱では越後の長尾為景、相模の北条早雲と連携し、上杉顕定が反乱を起こした長尾為景を討つために越後国へ出陣し討ち死にすると白井城を奪還して上野国で山内上杉氏に対抗し続けました。景春が数十年にわたって上杉氏に対し反乱を続けたことは、関東における上杉氏の勢力を衰退させることに繋がりました。

景春の孫の景誠が大永7年（1527年）家臣に暗殺されると総社長尾家から憲景が跡を



継ぎますが、新興勢力の長野氏に圧迫され、長野業政の影響で総社長尾氏と共に山内上杉氏の傘下に復帰します。やがて上杉憲政が長尾景虎に家督を譲るとこれに仕えるようになりました。

上杉謙信（長尾景虎）の関東出兵の際にはこの傘下にはいり、謙信が亡くなると武田勝頼に、武田家滅亡後は織田信長配下の滝川一益に仕え、本能寺の変で一益が伊勢に退去すると北条氏の配下に入りと時の支配者に属して所領を保持してきましたが、天正18年（1590年）の小田原征伐で前田・上杉軍に敗れると白井長尾家の上野での領地は失われ、越後の上杉景勝に仕えて米沢藩士となりました。白井城は江戸時代に白井藩となり藩主が度々代わり、元和9年（1623年）廃藩となって廃城とされ破脚されました。

3. 総社長尾氏

白井長尾家と分家した総社長尾氏は総社（前橋市）を本拠地とし、蒼海城（おうみじょう）に勢力を張りました。当初は足利・白井・総社の各長尾家の中から上杉家の家宰を勤めましたが、白井長尾家が二代にわたり上杉家の家宰及び上野・武蔵の守護代を兼ねて勤めていると、その勢力は強大になり主家である山内上杉顕定にとって看過できない状況になりました。五十子の陣で古河公方の足利成氏と対峙しているときに白井長尾家の景信が亡くなると当主である顕定は家宰職を総社長尾氏の長尾忠景に任命し、白井長尾家の力を削ごうとしますが、これに反発した長尾景春が乱を勃発させます。

家宰となった長尾忠景は主君上杉顕定について各地を転戦しますが、甥である景春との戦いや上野国においては急速に力を付けてきた国人勢力の長野氏らへの対応など終生戦いの人生を送りました。

忠景の後を継いだのは養父が忠景の息子顕忠であった顕方で、上杉顕定の後継争いで顕定の養子で古河公方の実の弟である上杉顕実側に伯父の成田顕泰と共に鉢形城（埼玉県寄居町）において同じく顕定の養子である上杉憲房と争いますが、横瀬景繁・長尾景長（足利長尾氏）に敗れ家宰の地位を足利長尾氏に奪われてしまいました。

これを恨みに思った顕方は大永4年（1524年）相模の北条氏綱と通じて謀反を企てま



すが憲房の後を継いだ上杉憲寛の命を受けた従兄弟の長尾顕景に当主の座を奪われてしまいました。以後総社長尾家の家督は顕景の子孫に受け継がれることとなります。

しかし、この顕景も白井長尾氏の景誠とともに越後の長尾為景と通じたため憲寛の命を受けた長野信業に攻められて降伏し、出家して家督を息子の景孝に譲りました。やがて総社長尾氏は武田信玄の侵攻で領地を失い上杉謙信を頼って越後へ落ち延びることとなりました。景孝の子長尾景秀は上杉景勝に従い越後の新発田城攻めに加わり、討ち死にしてしまい総社長尾家は断絶してしまいました。

4. 山内上杉家家宰職

室町時代の中期から関東管領職を独占した山内上杉家の筆頭重臣としての家宰職が置かれ、その任は長尾氏一族が任命されていました。この家宰職は山内上杉家本国である上野国の守護代を兼ねており、上野における国務も任されていて、家来とはいえその権力は上野国全般に及び上杉家分家よりも権力・勢力は大きかったと思われ、当初その任は足利・白井・総社の中から選ばれていましたが、ひとたびそのバランスが崩れれば「長尾景春の乱」のような争いを起こすものでした。

家宰職13代目の長尾当長の代に関東管領上杉憲政が北条氏康によって上野国から追われて家宰職もこの時点で消滅したものと思われます。

歴代家宰

初代：長尾満景（鎌倉・足利家）→2代：長尾房景（鎌倉・足利家）→3代：長尾忠政（総社家）→4代：長尾景仲（白井家）→5代：長尾実景（鎌倉・足利家）→6代：長尾景仲（再任：実景暗殺による）→7代：長尾景信（白井家）→8代：長尾忠景（総社家）→9代：長尾顕忠（総社家）→10代：長尾顕方（総社家）→11代：長尾景長（鎌倉・足利家）→12代：長尾憲長（鎌倉・足利家）→13代：長尾当長（鎌倉・足利家、家宰職消滅）

5. 長尾景虎の関東出兵

越後長尾家は長尾景忠から養子となって越後守護代を譲られた景恒を祖とし、上田長尾家（新潟県南魚沼郡）、古志長尾家（長岡市）、府中長尾家（三条市）の3家に分かれ、府中長尾家が代々守護代の職を世襲していました。越後守護である上杉氏を補佐する立場ではありましたが度々対立し、長尾為景のときに永正4年(1507年)下克上を果たしましたが、国内は一族の上田長尾家を含む国人衆と激しく対立しました。



上杉謙信平井城奪還の跡

為景の死後跡を継いだ晴景は病弱で越後国の統一に失敗し、弟の景虎（上杉謙信）が

家臣によって担ぎ出され長尾家を継承しました。天文21年（1552年）には上野国から落ち延びてきた関東管領上杉憲政を保護し、これによって北条氏康と敵対関係となりました。8月には上杉憲政を立てて関東に派兵し、沼田城を攻める北条軍を撃退、憲政の居城であった平井城の奪還にも成功しました。しかし信濃国で武田晴信が信越国境近くまで進軍してきたため弘治3年（1557年）信濃国へ自ら出兵し川中島で三度目の武田軍と対峙しましたが、大きな戦闘はなく越中国で一向一揆が勃発したため軍を撤兵しました。

その後景虎は永禄2年（1559年）二度目の上洛をして、正親町（おおぎまち）天皇や將軍足利義輝と謁見し、義輝からは管領並の待遇を与えられました。

永禄3年（1560年）5月景虎は北条氏康を討伐するために関東に向けて上野国へ越山し、三国峠を越えると北条方に落ちていた旧上杉関東管領の所領であった名胡桃城（みなかみ町）・沼田城（沼田市）・白井城（渋川市）・厩橋城（前橋市）等の諸城を攻略し、厩橋城に関東における拠点置いて関東各諸將に北条討伐の号令を下し、参陣を求めました。これに呼応した諸將は景虎の基に参陣し、翌年には武蔵国へ進撃を開始して支配範囲を拡大しつつ相模国まで侵攻しました。氏康は武略に優れる景虎を相手に野戦は不利と判断し、各主要の城での籠城作戦をとりました。

城を取り囲むのは旧上杉家家臣団10数万余の大軍で各城を攻撃し氏康を窮地に追い込みますが、北条と同盟を結ぶ武田信玄が川中島で軍事行動を起こす気配を見せたり、味方内にも長期に亘る出兵を維持できない將などが無断で陣を引き払ったりなどしたため、小田原本城を取り囲みながら落城させるには至らず、鎌倉まで兵を引きました。

この時、鎌倉の鶴岡八幡宮において山内憲政の要請もあって、山内上杉家の家督と関東管領職を相続し、上杉政虎と名を改めました。

武田信玄に対応するため帰国の途に付いた政虎は、武蔵国松山城や上野国厩橋城に城代を残し帰国しました。第四次の川中島の戦いでは武田軍に大打撃を与えましたが、自軍にも多大な被害を受け、信濃をめぐる武田・上杉の抗争は収束していきました。

この年の11月には武田軍が西上野に侵攻を開始し、北条軍と呼応して上杉軍が支配していた所領を奪還してゆきました。これを受けて政虎は再度関東へ出兵し、武蔵国北部で氏康と抗戦しますがこれに敗退し、結果武蔵国は北条軍への帰属が増えることになりました。12月には將軍の一字を賜り輝虎と改め、この年は越後へ帰国せずに厩橋城



で都市を越しました。

永禄4年には信玄の上野侵攻に徹底抗戦していた箕輪城の長野業政が病死すると信玄の攻勢が始まり、氏康もまた武蔵国を北進して行きました。これにより関東の諸将は、輝虎が関東へ出兵してくれば上杉に恭順・降伏し、越後へ引き返せば北条方へ寝返ることを繰り返しました。

新しい將軍足利義昭からも関東管領を命じられた輝虎はその後も関東出兵を繰り返しますが、越中



での一向一揆対策や武田信玄の西上野支配により関東における領地は東上野に留まりました。やがて武田と北条の関係が悪化し、北条氏康は上杉との和睦を探るようになり、輝虎は度重なる戦で国内の不満も高まっており信玄への牽制を含め宿敵であった北条との同盟を結びました。この行為は関東諸将の不信感を招く結果となりました。元龜元年（1570年）氏康の息子北条三郎を養子として迎え、三郎を大いに気に入り自身の初名である景虎を与え、この年12月に自身は謙信と法号を名乗りました。

関東の覇権を争った北条氏康の死後、跡を継いだ氏政は謙信との同盟を破棄し、武田信玄と再び同盟を結んだため再び北条と敵対することとなります。謙信は上洛の目的により主戦場を越中に移しますが、北条の関東北進により上野国から救援要請が届くたびに後方の憂いを無くすため関東に派兵しました。

（この続きは上野国・戦国時代その5で記述いたします。）

★宝治合戦（ほうじかっせん）

鎌倉時代の宝治元年（1247年）に起こった鎌倉幕府の内乱で、北条得宗家と相模国の有力御家人の三浦氏の対立から武力衝突が起こり、北条氏と外戚安達氏らによって三浦氏が滅ぼされた。

★古河公方（こがくぼう）と堀越公方（ほりこし又はほりごえくぼう）

室町幕府が関東統治のため鎌倉府を開設し、鎌倉公方を派遣したが、第4代鎌倉公方・足利持氏と第6代將軍足利義教・関東管領上杉憲実と対立し、持氏が討たれて一旦は鎌倉府は廃された。持氏の遺児足利成氏第5代鎌倉公方となるが享徳の乱を契機に鎌倉から下総国古河（茨城県古河市）に本拠地を移し、初代古河公方となった。幕府は新たに鎌倉公方を派遣したが鎌倉には入れず、伊豆堀越に御所を建て堀越公方を名乗った。